



TITLE:

<批評・紹介>唐代の史學思想 金井之忠著

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介>唐代の史學思想 金井之忠著. 東洋史研究 1940, 5(4): 307-311

ISSUE DATE:

1940-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145691>

RIGHT:

ひもかなりひどい。一々言つてゐては際限のないことであり、少々の例を持ち出しては仕方がないから、こゝには一切云はない。とにかく篇目の取捨と分類との點より云へば、舊版より大いに劣つてゐる。かうして第二版が出たところを見れば、數年すれば第三版もまた出る計畫なのだらうと思ふ。その際には十分の周到さを以てせられんことを切に望む次第である。

〔藤枝 晃〕

唐代の史學思想

金井 之忠著

昭和十五年二月二十日弘文堂發行
(教養文庫)一六二頁

金井氏が何故唐代を取り上げられたかに就ては序文にも本文中にもこれといふ説明が見當らない。序文に「支那史學史の一節として又隋唐時代の理解に資する一助として讀まれることを望む」とあるだけである。普通考へられてゐる所では唐代は支那史學史全體からして確かに最も重要な時代の一つであるとしてゐる。一言にして言へば唐代は史書のオーソドックス即ち正史といふものが一應完成して丁度同時に行きづまつた時代である。正史といふ觀念、正史を作る爲の體例、正史を作る爲の史館の組織等あらゆる點に於て唐代はそれ迄の時代の集大成の時期であつた。これより後の時代に於ては支那の史學は正史そ

のものではもはや何等見るべき發展をなさず、史學者達は正史以外の形式に於てより多く活躍する様になつた。通典を宗とする一群の類書と通鑑を祖とする編年體及び紀事本末體の史書等がその主なる形式である。又唐以後の史學者は史書の編纂以外の研究にも手を染める様になつた。さうして見るとつまり唐代は一般史に於てもさうである如く漢代以來の集積物を一應總決算した時代だといへる。この意味でそれは確かに重要な意義を持つ時代ではあるが、驟つて史學史研究者の切實な求真的心情よりすればこれは必ずしも餘り興味ある時代とはいへない。何故ならばそれは史學の製作が私撰より官撰へ、個人の手より數多の史官の手へ移つた時代であつて、換言すれば正史が著述より編纂物へ墮落した時代である。多人數の手に成る編纂物といふことになれば一貫した思想や方針が稀薄になるのは當然である。編纂の爲の義例が發達したのはこの弊害をなるべく少くしようとする努力の表れに外ならないが併し何といつても編纂物にはついに編纂物に過ぎない。個人の優れた史觀がそこに鮮明に表はれることなどは求める方が無理である。劉知幾の史通は史館に於ける編纂の義例の理想を述べたものであつて唐代（特に初唐）史學界の代辯者の觀があるが、彼の立場が史館の編纂物を目標とする限り吾々の興味も自ら限られたものにならざるを得ないのである。

金井氏は賢明にも唐代の史學を純粹に史學史的立場よりせず寧ろ時代全體の風潮と結びつける方針を取られた。氏の眼目とされる所は凡そ次の通りであらうと思はれる。

南北朝頃から史學に二つの重要な傾向が現はれ始めた。一つは史學が經學に對して獨立の地位を認められ始めたこと、一つは國家が前朝の歴史を國家の手によつて作る風が次第にはつきりして來、史館の制度が次第に確立して來たことである。この二つの傾向は隋唐時代に至つて一應その頂點に達する。この傾向の由來する所を見るに、南北朝時代に於てはそれは南北朝の對立の爲に生じた國家意識の表はれであり、隋唐時代に入つては統一國家の大帝國思想の表はれであると考へられる。唐初に作られた五朝史（梁陳齊周隋）及び晉書等はその書き方、體例の立て方、編纂の事情等いづれよりするもこの傾向を表はしてゐないものはない。けれどもこの傾向は稍々後に出た劉知幾の史通を以て一應行きつまりに達し、安史の亂以後の國家社會上の情勢の變化により別に新たな一つの傾向が生じた。それはこの時代に至つて唐朝は政治、軍事、及び社會情勢等の諸點に於て容易ならざる危機に直面し始めた。その危機を逸早く感じた二三の識者が爲政者に對して警告を發する意味で著はした史書が出たことであつて、政典（劉知幾の子劉秩の著）及び通典が即ちそれである。勿論この二書とてもその時代の風潮の表は

れであり、同時にこの二書を見ればその時代がよく分るといふ點では前記諸書と何等變りはない。この二書以後史學は國家意識などの如き單なる思想よりも、もつと切實な實際の政治によつて其方向を決定される様になつた。

以上が大まか乍ら金井氏の說の大體である。氏が取り上げられた史書は前記の如く五朝史、晉書、それに南史北史及び史通、政典、通典の十一書である。この中、政典はその書が今日残つて居ない爲に普通は擧げられないものであるが、それを他の十書と並べて唐代の代表的史書の中に加へられたのは金井氏の卓見である。氏は政典の著者の劉秩に關して「劉秩遺說考」なる一論文を草して居られる。それによれば通典及び唐會要に政典の文が引用されて居るので其の内容の一部も窺ふことが出来るし、又舊唐書杜佑傳の文によつて杜佑の通典が政典と關係あることも分るとある。要するに政典の價值を認めた事は氏の功績である。政典以外の書に對しては一々引用が擧げてないので、どこまでが從來の學者の說で、どこまでが氏自身の新研究であるか私にはよく分らないが、いづれにしても先輩學者の諸説を十分理解した上の書きぶりであると思ふ。さすがは岡崎博士の門下であると肯かせられる。

吾々は歴史を觀るのに、史書を通じてするのが最も普通である。然らば吾々は史書の中に書かれて居る史實を鵜呑みにする

前にその史書を作つた人間のものゝ考へ方やその本を作つた態度を先づ調べてかゝらなければならない。更に一步進めて、史書に書かれてゐる史實の詮索をするよりも史書の書かゝれ方に注意を主として向けて、それによつてその時代の風潮を察する方が大局に於て間違が少い。といふのが岡崎博士の持論である。私は思つてゐる。但し史書に對するかういふ取扱ひ方には多少の注意を要する。それは時代によつて史書の書き方やその内容が比較的社會全般の風潮をよく表はす場合と然らざる場合とがあるといふことである。私は曾て岡崎博士が京都の東方文化研究所でされた講演を聞いたことがある。その講演の中で博士は「同じ唐代でも前半の唐朝の盛な間は朝廷は社會全體とよく接觸する機會があつたから朝廷の記録は比較的社會全般のことに行き互つてゐるが、後半唐朝の勢力が衰へると朝廷の記録は單に朝廷の中だけの記録の觀を呈するに至り、従つて史官の作る國史（朝廷が當代の歴史を書いたものを國史といひ、普通正史は前朝の國史に基いて次の王朝によつて作られる）も社會全體の歴史としては非常に不完全なものになつて了つた。舊唐書はこの缺點をそのまゝ背負つてゐる」といふ風なことをいふたのを憶えてゐる。金井氏が問題にされた唐代は即ち唐の前半である。従つてかゝる注意は餘り必要がないといへないこともない。けれども讀者の側からいへば、かういふ注意を前提とす

ることも一應は必要であらう。氏をして言はしむれば舊唐書の前半と後半の質の差こそ最もよく唐朝の盛衰を表はしてゐるではないかといふことになるかも知れない。併し乍らそれをいふ爲にはそれだけの前提が要るのではなからうかと私はいひ度いのだ。

史書の書き方に於て時代の風潮を觀るといふ岡崎博士の考へ方を金井氏が祖述されたものと私は勝手に決めて了つたが、かういふ豫備智識を持たない讀者が本書を讀んだ場合はどうであらう、氏の書きぶりだけでは讀者は或はかういふ印象を受けるかも知れない。金井氏の導かれた結論は寧ろ時代の風潮によつて史書の書き方を解釋したものだ、氏の胸中には豫め時代全體に對するかく／＼の智識があつて、その智識を史書の書き方に於て立證したに過ぎない。若しさうだとすると、序文の「史學なるものは歴史家によつて記述された歴史であり、其は事實の歴史によつて決定される」といふのは先づいゝとして「我々が或る時代の歴史を理解せんとする場合、其時代の歴史家の歴史の理解を通じて其時代の特質を考へる必要がある」といふ一句はどういふことになるのだらうか。といった疑問が起らないとも限らぬ。「其時代の歴史家の歴史の理解を通じて其時代の特質を考へる」といふ文章は吾々が讀むと「他の方法では今一つ分り難い場合、其時代の歴史家の歴史の理解の仕方によつて其時

代の特質を考へる」といふ意味に取れさうに思はれるのだが、實はさうでなくて「或る時代の特質が既に分つてゐる場合、その特質を其時代の歴史家の歴史の理解を通じても考へて見る」といふ意味に取るべきなのであらうか。氏の書きぶりから推すとどうも後の方の意味に解釋せざるを得ない様に思はれる。一々本文を引用するに堪へないが、氏が綜括的敘述をされてゐるどの頁（五朝史の特質三十一―卅一頁。晉書の綜合的批判四十二頁。南北史の特色四十七頁。史通の綜合的批判八十八頁。政典の時代的意義九十五―六頁。結語百五十九―六十一頁。等）を見てさうである。實際に於ては氏自身は或は史書の書き方の側から時代の風潮を割り出された點もあるのかも知れないが、少くとも氏の口調では常に時代の方から史書を觀て居られる様に思はれる。

若し氏が時代に基いてのみ史書を觀られたとしたら、それは史學史研究の立場としては大なる片手落ちと言はなければならぬ。何故ならば史學の歴史の持つ性質の中には時代の風潮と關係の深いものもあるけれど、中には殆んど關係のないものもあるからである。そして單に史學史の立場だからすれば時代の風潮と關係の深い性質が必ずしも重要な性質であるとは限らない。例へば晉書の編纂は國家的には金井氏の說かれる如き重要な意義があるかも知れないが史書の質からいへば明に品質低下

の譏りを免れない。結局問題は史學史に於ける價值をどこに決めるかといふことになつて来る。この點に關しては金井氏の價值意識は極めて不鮮明である。從來の東洋史學者の不鮮明さから一步も出てゐないといつても過言ではないと思ふ。極言すれば價值の意識なくして何の批判ぞやである。金井氏の著書の中から歸納的に氏の價值觀念を強いて抽出出来ないことはない。けれども望むらくは他日氏自身明確なる意識の下に氏の歴史乃至は史學史に於ける價值を説明せられるのを聞きたいものである。

こと細かに功罪を論すれば際限がないが、終りにこの書を教養文庫の中の一冊として見返して見やう。嚴密な意味の學術書としてでなく半ば通俗的な讀物として見た場合にはこの書は仲々實のある本である。唐代の史學と史學史全般、特に後の時代との關係の説明がなさ過ぎる嫌ひはあるが、書かれてゐる範圍では筋もよく通つて居るし、前後の配置も用意周到である。就中梁書、晉書、南北史、史通、通典等の説明は史籍解題の意味からいつても懇切を極めてゐる。唯史通や通典の内容を紹介するのにあんなに多くの頁を費やす代りに、もう少し一般的な記述を親切にしてはどうかとも思はれるが、併しそれも考へ様によつては内容のない一般論をくどくど述べ立てるよりも漢文の名著の内容を分り易い日本語で紹介して貰つた方が面白いとい

ふ人もあるかも知れない。尤もさうなれば著者の役割は單なる良き翻譯者といふことになつて了ふが。

いづれにしても數多い東洋史學徒の中で史學史や史學理論の

研究家の少いのを嘲つてゐる今日、金井氏の如き有力な研究家の出たことは誠に喜ばしいことと言はねばならない。

〔内藤戊申〕

漢 口 通 信 (續)

日 比 野 丈 夫

○蒲圻から歸つて漢口で二日休息し昨日早朝軍用車に便乗させて貰ひ信陽までやつて参りました。勿論貨物列車で、十一時間程かかりました。信陽の町は思つた程特徴のある所ではありませんが西と南の城壁に沿つて潯河の流がありそれを隔てゝ峻しい山がめぐつてゐます。

縣政府に泊めて貰ひました。北郊の子貢の祠へ行つてみました。此處は子貢の宰たりし所、古の申伯の國です。西北五里半許の游河鎮の古墳から昨年相當量の古銅器や石器土器等が偶然發見された由。銅器には仲々立派なものもあつたとの事です。(三月二十六日 信陽にて)

〔編者附記〕 游河鎮は淮河の上流域にあるが、その下流

の岡始や壽州からは既に西洋人の淮河式と呼び支那人の楚器と稱する一群の銅器が出土してゐるから、この出土物も或は類を同じうするものと思はれる。詳報を鶴首する。

○今朝早く信陽を發つて十時頃新店で下車し雞公山に登りました。相當の急坂です。「青分楚豫。氣壓嵩衡」といふ刻石があります。正に河南湖北兩省の境界で高さ八〇〇メートル許りだそうです。奇巖あらはれ雞公頭小雞公頭等の名がついてゐます。すべて花崗岩ですから水は非常にきれいです。(三月二十七日 雞公山にて)